

2020年、大阪府茨木市で新しい芸術祭、「茨木映像芸術祭 / Ibaraki Film Arts Festival」がスタートします。  
8分19秒以内の映像作品を地域・年齢問わず幅広く募集します。

8分19秒とは「太陽から私たちに光が届くまでの時間」であり、本芸術祭は実体のない光の作品である「映像」をテーマとした短編映像コンクールです。

作品は審査員の選考によって各賞が与えられ、入選作品はインターネットで一般公開されます。併せて上映イベントを開催し、広く鑑賞いただける場を設け、市民生活の中でアートに触れる機会を提供します。

※上映イベントは新型コロナウイルス感染拡大の予防により、変更・中止する場合があります。

#### 募集期間

2020年7月7日(火)～12月18日(金) 必着

#### 各賞

グランプリ 30万円(1作品)

準グランプリ 20万円(1作品)

特別賞 10万円(2作品)

市民審査賞 7万円(1作品) 市民が決定する審査賞

グッド賞 3万円(1作品) YouTube公開でのグッド数による投票賞

#### 受賞作品の発表

2021年3月1日(月) 13時に公式ホームページで発表

※授賞式は行いません。

<http://www.819art.com>



#### 問い合わせ先

茨木市 市民文化部 文化振興課 振興係 茨木映像芸術祭実行委員会事務局  
[bunkashinkou@city.ibaraki.lg.jp](mailto:bunkashinkou@city.ibaraki.lg.jp) (問い合わせはメールのみで受付します)

#### 主催

茨木映像芸術祭実行委員会

#### ディレクター

One Art Project

<http://www.oneartproject.net>

茨木市は、淀川の北、大阪府の北部に位置し、人口は28万人を超える北大阪地域の中核となる都市です。豊かな自然と交通の利便性に恵まれ、古くからの歴史遺産や文化的伝統が今もまちに息づいています。

作  
品  
募  
集

I b a r a k i  
F i l m  
A r t s  
F e s t i v a l



茨 木 映 像 芸 術 祭

#### 募集期間

2020年7月7日|火| - 12月18日|金| 必着

グランプリ 30万円(1作品)

準グランプリ 20万円(1作品) 他

#### 審査員

木村光佑 | 造形作家・茨木美術協会会長

加須屋明子 | 京都市立芸術大学教授

おかげんた | 吉本芸人・アートプランナー

林勇氣 | 映像作家・美術家



## 応募資格

- ・個人・グループ・地域・年齢・プロ・アマチュアを問いません。
- ・個人・グループにつき各1点まで応募できます。
- ・応募の時点で20歳未満の応募者は、保護者等の同意を得た上で応募してください。

## 応募規定

- ・映像を表現手段とした現代アート作品。
- ・8分19秒以内の映像作品。(タイトル・クレジット画面を含む)
- ・単体の映像作品(一画面の放映で成立するもの)※インターネット公開や上映イベントでは基本16:9のサイズの画面での上映を想定しています。
- ・2018年1月1日以降に制作した未発表作品。
- ・応募作品は公序良俗に反しないものに限りません。
- ・過去に他のコンテストに入選した作品の応募はできません。

## 応募方法

- ・映像データはmovもしくはmp4形式で提出してください。
- ・公式ホームページ上の応募書類をダウンロードして記入のうえ、映像データと併せてUSBメモリーかSDカードに収録し、郵送してください。
- ・日本語以外の言語による映像には、日本語の字幕を入れてください。

## 応募料

無料(応募のための費用は応募者の負担となります)

## 応募先

茨木市 市民文化部 文化振興課 振興係 茨木映像芸術祭実行委員会事務局

〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

bunkashinkou@city.ibaraki.lg.jp

## 作品の取り扱い

- ・応募作品 USBメモリー・SDカードの返却はしません。
- ・応募作品の著作権は応募者に帰属します。
- ・応募後の作品の訂正・返却には応じられません。
- ・審査に関するお問い合わせには応じられません。
- ・入選者へのみ、映像公開の案内を通知いたします。また、公式webサイト上に選考結果を掲載します。
- ・本芸術祭は上映費その他費用を応募者に支払わないものとします。
- ・本芸術祭は入選者の渡航費、宿泊費を負担しないものとします。
- ・入選作品は本芸術祭の周知・宣伝及び関連イベント等のため、無償で上映、複製、編集、公衆送信(放送)、自動公衆送信(公式ホームページ、動画配信サービス等での公開)、印刷、展示等に使用することがあります。
- ・受賞に関する諸手続きについては、受賞者に別途ご案内します。
- ・作品中に使用される美術、映像、写真、及び音楽等については、必ず著作権者の許諾を得た上で応募してください。仮に第三者から権利侵害、損害賠償等の主張がなされた場合、応募者が自らの責任で対処することとし、主催者は一切の責任を負いません。
- ・応募作品は、本芸術祭実行委員会事務局にて保管します。
- ・応募作品は、審査及び記録に必要な範囲で複製することがあります。
- ・応募者は、作品を応募した時点で本募集要項に記載されている内容に同意したものとします。

茨木映像芸術祭の詳細については公式ホームページをご参照ください。

茨木映像芸術祭公式ホームページ

<http://www.819art.com>



現代社会においてアートの発信方法や鑑賞のかたちは様々です。個人的な表現でさえ誰もが等しく公に発信できるようになり、誰もが世界中の作品を容易に閲覧できるようになりました。しかし、世の中にあふれた膨大な画像や映像を選択し向き合うことは難しく、多くの表現がこの瞬間にも通り過ぎてゆきます。

表現方法や鑑賞形態が多様化する中で今一度「つくること・みること」について考えることはできないでしょうか。いつの時代も自己や社会と真摯に向き合ってきたアートを「光」と捉え、今という時代の表現を地域を越えて多くの人に届けます。

時間と密接に関わる「映像」が、過去と現在をつなぎ、勇気を持って未来に踏み出すものになることを願って。

## 入選作品の公開

審査員による入選作品(計15作品程度を予定)を、2021年2月1日からWEB上で公開予定。(グッド賞選出のため、この時点では受賞作品の発表は行いません)

作品の公開は入選作品を公式ホームページ、YouTube 特設チャンネルにて公開します。

・茨木映像芸術祭公式ホームページ：<http://www.819art.com>

## 審査員

若い頃、透明の亚克力板に、人物や建築物をプリントしたことがある。間隔をあけて数枚並べると、映像を見ているような効果が出て、ワクワクした。茨木映像芸術祭では、どんな作品が応募されるのか、たくさんのワクワクに出会いたい。(木村光佑)



### 木村光佑

(造形作家・茨木美術協会会長)

- 1959年 京都市立美術大学(現・芸術大学)日本画科卒業
- 1971年 第11回サンパウロビエンナーレ・日本代表
- 1972年 第1回ノルウェイ国際版画ビエンナーレ展国際大賞
- 1978年 現代彫刻展 東京国立近代美術館賞
- 1996年 京都美術文化賞、紺綬褒章
- 1998年 京都工芸繊維大学第9代学長就任
- 1999年 紫綬褒章
- 2012年 瑞宝中綬章
- 2020年 近現代版画の名作、もうひとつの日本美術史(和歌山県立近代美術館)

パブリックコレクションに東京国立近代美術館や京都国立近代美術館、国立国際美術館、ニューヨーク近代美術館、サンフランシスコ近代美術館など多数。



### おかけんた

(吉本芸人・アートプランナー)

- 2007年 『アートフェア東京』アート・トーク&ツアーガイド(〜10年)
- 2008年 『ART OSAKA』トークイベント企画 MC(〜12年)
- 2012年 『草間彌生 永遠の永遠の永遠』おかけんたギャラリートーク 国立国際美術館、[ART KYOTO 2012] ギャラリートーク 国立京都国際会館
- 2014年〜 『京都国際映画祭〜映画もアートもその他もぜんぶ〜』アートプランナー
- 2015年〜 あまらぶアートラボ[A-lab] アドバイザー
- 2018年〜 京都精華大学 芸術学部 客員教授  
ほかアート関連活動多数



### 加須屋明子

(京都市立芸術大学教授)

国立国際美術館学芸員を経て現京都市立芸術大学美術学部・美術研究科教授。専門はポーランド及び日本の現代美術、美学。主な展覧会企画「芸術と環境—エコロジーの視点から」、[転換期の作法—ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリーの現代美術]、「死の劇場—カントルへのオマージュ」、[セレブレーション：日本ポーランド現代美術展]など。主な著書「ポーランドの前衛美術—生き延びるための「応用ファンタジー」」創元社、「中欧のモダンアート」(共著)彩流社、「中欧の現代美術」(共著)彩流社など。2011年より鹿野アートプロジェクト芸術監督。



### 林勇気

(映像作家・美術家)

映像作家。1997年より映像制作を始める。膨大な量の写真をコンピューターに取り込み、切り抜き重ね合わせることでアニメーションを制作。自ら撮影した写真のほか、人々から提供された写真やインタビューも素材とした制作スタイルにより、デジタルなメディアやインターネットを介して行われる現代的なコミュニケーションや記憶のあり方を問い直す。近年は他ジャンルとのコラボレーションや、子どもたちのワークショップを通しての作品制作・展示も多数試み、映像が内包する社会性について模索している。現在は大阪の Super Studio Kitakagaya (SSK) を活動の拠点にしている。<http://kanyukuyuki.tumblr.com/>